

# 詩劇「雪女」

原子 修

1

暗黒

沈黙の糸をひいて降る雪  
はじめかすかに 低速で  
やがて

しだいに密度とスピードを増し  
吹きつる風の音

雪のまっしろい断片が風にあやされて乱舞し  
空間の巨大な洞の奥から

吹雪のけものをよびます  
牙をむき

のどをひらき

吠えたける吹雪のけもの  
その蹄の下からもれてくる  
かぼそいすすり泣きの声

「夏のまばゆい光の森の  
栄華の小径にそって

燃えさかるいのちの糸をたぐれば  
いつしか

あかるい雲母の歓声をはりつめた空が

ひび割れ

むすうの雪の結晶にだけ散って

冬が

夜の扉をとぎす

失われた火の王国 亡びさった緑の連邦が

純金の目と同じ

暗黒が

死のふぶきとなって吠えたけり

食いちぎられていくのは

だれの

季節の喉咽笛か」

ふぶきのけものしだいに頭を垂れたてが

みを伏せて地にうずくまり、

空隙の雪かるやかに舞い

光ついえ

暗黒

2

女 世界の底に孤独の影をひいてあらわれ

語り 歌い 踊り 笑い 泣き 生き 死ぬ

「意識は

光のホッキョク鷹でございましょうか

鋭い羽音で青ざめた時空をひき裂き 突如

おのれのハイヌーンのいただきに舞いお

りてくる 猛禽でございましょうか

はっ と気づいたとき

すでに わたしは

過去という みしらぬ無限の大地の最先端

の

牙むく濁流にむかって危ふくせりだした

現在という雪の底のうえに

ひとり たちすくんでいたのでございます

ここはどこ？

だが

こたえるのは 数億トンもの鎮魂歌を狂い  
うたう雪どけ水のすさまじい疾走ばかり

わたしはだれ？

しかし

応ずるのは かなりの川幅いっぱい 宇  
宙の乱れたところをそのかたちのままにう  
つしだす 鏡の煮えたぎりばかり

そのときでございます

液体の狼の大群のように移動していく水の  
中程に

くつきりと 白い花の筏がみえたのでござ  
います

いえ

それは

いちわのオオハクチョウのむくろのようで  
もございます

空を失ったものの永遠の悲しみを

純白の花びらにしぼり洗う

うつくしい人の 末期のようでもございま  
す

待って！

おもわず身をのりだしたわたしの足もとに  
みしっと

不吉なひび割れの音がはしり

雪庇が

季節風のように傾むいて

あつ

大きな口をあけて濁流がわたしをのみこも  
うとした瞬間

——コレニ ツカマレ！

ハルニレのように逞ましい男の声といっし  
よに

するすると一本の櫂がのびてきて

間一髪 すがりついたわたしは

危ふく

死の川の流れから生の岸边へとひき戻され  
たのでございましたが

それが

幸いの海に漕ぎだす光の櫂か

不幸の瀧壺へといざなう暗黒の櫂か

知るべくもなかったのでございます」

3

「イシカリ川は

大地を断ち割る光の鉋でございます

水勢のするどい刃が

古代の地層をけずり

歴史の背を研ぎ

生きてよこたわる液体の樹木を

イシカリの野に投げだすのでございます

それは

吠えたける蛇

悶える鳥

横転する水のけものでございます

それは

時間の扉をひらきつづける鍵

世界の容積を目測する目の秤

そして

季節の蜜を汲みあげる水平な釣瓶でござい  
ます

しかし

その川底にひしめくヤツメウナギをすなど  
って生きる漁師のヤシベは

なぜ

救いの岸に立ったわたしの顔をみて

あっと 声をのみ

不安の灰とよろこびの火を同時にかけ抱く

炭火のような声でいったのでしょうか

——オラノ家サイグベ

すべての記憶を忘却の水に流しきって

おのれをたずねもとめる道しるべとていま  
はないわたしの

水草の根のようにつめたい手をとって

なぜ

家とは名ばかりの

なつかしい野の香りでいっぱいのカヤぶき

小屋の中へとみちびき

骨のずいまで氷の針に刺しつらぬかれたか  
のようなわたしの体のこごりを

パチパチと音たてて燃えあがる囲炉裏の火  
に

とかしきってくれたのでしょうか

——ハラ スイタベ

かいがいしく立ちあがり

ザクロの実のように割れた鉄ナベにあやふ  
く炊いてくれた一碗の味噌汁は

雪の下から掘りだしたフキノトウの芽の香  
ばしきといっしょに

わたしのはらわたの闇を照らす陽ざしとな  
って

熱くしみわたり

鯨の歯のように欠けた茶碗によそってくれ  
た一杯の稗<sup>ヒナ</sup>ごはんは

慈悲の車をわたしの飢えの国の首府へとは  
こびこんでくれましたが

なぜ

恵<sup>ウツワ</sup>みの器をさしだすヤシベの指は

草の葉のように青く震え

——ココデ イッシュヨニ クラスベ

と言ってくれるヤシベの舌は

鈴のようにおののいていたのでございまし  
ようか

とわいえ

この地上に

呼ぶべき名 住むべき家 たずねあてるべ  
き知人すら記憶の地図から消しさられて  
しまったわたし

——この家のうしろに傾むいて立つ

漁具小屋の片隅にでも住まわしていた

できれば それで もう……

と申しでて

ヤシベのさしのべてくれた好意の

幹よりは枝 枝よりは梢の方をいただこう  
としたわたしは

なぜか

この みずしらずの しかし 心根はいつ  
も炉端の火のようにあたたかい若ものこそ  
あるいは

わたしの失われた記憶の全量が

そっくり 人のかたちをかりてよみがえっ  
たもの……

とおもえて仕方なかったのでございます」

4

「雪と水のくににやつと訪ずれた  
芽ぶきの春

残雪のはざまから

フクジュソウの花が純金のラッパを吹き  
鳴らし

めざめた森の踵を

オニシバリの花が金いろにあらって

——オイデ オイデ 光ノサトへ

しきりに呼んでいるのは

萌えそめの草むらに緑のあけぼのをふりま  
いてまわる太陽の光の子どもたち

——オイデ オイデ 風ノクニへ

いっしんに招いているのは  
めざめの川原いっばいにすぎとおった羽根  
をひろげて飛ぶ風のわらべたち

——イクワ スグ イクワ

荒むしろ一枚の入口をおしあけ  
洞穴のほのぐらさをかもす漁具小屋から  
光まばゆい外界へとはじけるようにとびだ  
していったわたしではございましたが

パッと灼熱の球を焚く太陽のまばゆさに目  
がくらみ

おもわず棒杭のように立ちどまってしまっ  
たのでございました

なんということではございましょうか

コーンフラワーいろの血をしたたらすエゾ  
エンゴサクの花……ウイスタリアいろの涙  
をふりはらうカタクリの花……胡粉いろの

鏡に存在のはじまりの無をうつしだすシロ  
バナエンレン草の花……

これら 春の花々を祭るのとおなじ光おな  
じ熱が

いま

わたしのりょう目の潮水を干上がらせ い  
く筋もの髪の毛々らぎをすいとり 白魚の  
ようにうごく手の指をとかし去ろうとして  
いる……

いわれもない恐怖感のとりことなったわた  
しは  
つい

天のいただきにまでも木霊するよみがえり  
の季節の華やぎに背をむけて立ち  
われにもあらずささやいていたのでござい  
ます

——ヤシペ

ワタシノ イトシイヤシペ

イマ スグ ココニ アラワレ

言ッテ!

アナタコソ ワタシノ

ワタシノ 赦免ノ春

ワタシノ 再生ノ時

ト

5

「ああ

ほんとうに

わたしは だれなのでございましょうか

ふとわたしじしんに立ち帰ったイシカリ川  
のほとりで

カワヤナギの茂みから射ちだされるカッコ  
ーの声で眠りを破られ

暁暗の瀬から立ちあがってくる母屋のくろ  
ぐろとした影をいそいそとめくるようにし  
きをまたぎ

まだ眠りの世界の胞衣<sup>エナ</sup>を背にひきずってい  
るヤシペのために稗<sup>ヒナ</sup>ごはんを炊き

朝露をはらったばかりの香ばしいミツバを  
味噌汁の鍋にふりまき

ヤツメ漁の胴<sup>ドウ</sup>を背に負ってでかけたあとの  
ヤシペのひとり住いの窓辺を

一輪のミズバショウの花でそっと飾る

そんなわたしは

ああ

どこうまれ？ なんていう名？

ハイヌーンの太陽を

光の冠として頭にいただきながら

舟からあがったヤシペにぴったりと寄りそ  
って

いっしょにおむすびのお昼をいただきなが  
ら

つい

おのれの素姓をたずねてしまうわたしは

ほんとうに

どんな生いたち どんな過去の影をひきず  
る女なのでございましょうか

——ソイエバ オラア ドッカデ オメ

エソックリノ 雪ノヨーナ肌ノ 鈴ノヨ

ーナ目ラシタ女ト デアッタヨーナ気が

スル

記憶の梶をうしなって意識の海を漂流する  
ばかりの

あわれなわたしを慰めようとしてか

ぽつりぽつりと口を割るヤシペの目は

なぜが

遠い地平線にすいこまれてしまいそうなう

つろさに濡れているのでございます

でも

そんなヤシペの

魚の粘液にまみれたひざにとりすがり

——ネ

ソレハ イツ？

ドコ？

とたたみかけ

——ソノ女ノヒトガ

ワタシ？

と

想い出すようにせがむわたしは

ほんとうに知りたかったのでございます

この身の

雪よりも純白な肌のいわれ 光り輝やく漆

黒の髪の由来を」

6

「カモガヤのしぼりたての緑が

野の皿いっぱい盛りにあがって

北の地平を空の方へともちあげますと

はや

イシカリ川のほとりは 夏

無口で はたらきもののヤシペの

舟底は いつも

青光るヤツメウナギでずしりと重かったの  
でございます

それにしても

神は

どんないたずら心から このような不気味  
な生命を

この地上にもたらしたのでございまいしょ  
うか

ひとの心の裏がわをのぞきみるかのような  
八対の目

他の魚類の横っぱらに吸いつき

生き血をすすって殺す

どんらんな口

まさしく

水底の蛇……川をふしどとする妖怪ではご  
ざいせんか

よし

鳥目をいやす妙薬とか

蒲焼きが精をつけるとか申しまでも

なぜ

よりによって

このよううす気味悪い魚を……

と いぶかるわたしへの

ヤシペの答えほど

意外なものではなかったのでございます

はじめ 彼は

北の大地をまっぶたつに断ち割るイシカ

リ川が

億万トンもの水をニホン海へと吐きだす

ちょうど川口のあたりで

この川の主として古くからあがめられるチ  
ョウ鯪をすなごる漁師だったのでございます

とある冬の午さがり

川面をつたって低く飛ぶいちわのオオハク

チョウを発見したヤシペは

なぜか

そのまっしろい鳥と彼じしんが

ひと筋のすきとおった糸で固く結ばれてい

るのを感じ

あとを追ったのでございます

ところが

ちょうどこのあたりまでさかのぼって

とつぜん

オオハクチョウはまっしろい吹雪にかわり

ひゅうひゅうとうなり声をたてながら

ヤシペに襲いかかってきたのでございます

いきとしいけるものの 熱をすすりとり

血を氷らし 息の根を断たずにはおかない

白魔の雄叫び

ヤシペは 死を覚悟したのでございます

しかし

狂ったように吹き荒れた風雪が

はたとやみ

気がつく

ヤシペは

ちょうどこのあたりのヤチダモの林の中に

ひとり

雪まぶれで立っていたのでございます

なにがおこったのでございましょうか

九死に一生を得て川口に帰りついたヤシペ

ではございましたが

なおも

ひと筋のすきとおった糸が

彼じしんとだれかをしっかりと結びつけてい

るのを感じたヤシペは

親兄弟のつよい反対を押し切ってここに移

り住み

ひとり

ヤツメウナギをすなごりはじめたのでござ  
います

——オソロシイ吹雪デナ——

デモ キット ダレカガ オラノ命

スクツテクレタニチゲエネー

ダケド

吹雪ノトキノコトハ

ナニヒトツ覚エテイネエノサ

そう言って

ヤシペは 話の緒を結んだのでございまし  
たが

ひょっとして

氷のはった川のはのぐらい水底で

ヤシペから時間をすら食いちぎってしまっ

た猛吹雪の正体を

じっと観察していたのが

ほかならぬ あの

八対の目をもつヤツメウナギではございま

せんでしたろうか」

大地の扉をノックする液体の手

そして わたしは

はじまりもおわりもない時間の瀬を泳ぎぬける魚

たしかに川岸の<sup>トヤ</sup>苦屋の

着のみのままの単純なくらしは

野の草と血縁をむすぶのとおなじで

野辺に生いしげる セリ フキ

家の裏のささやかな畑にみのるササゲの実と

ありあわせの糧<sup>カテ</sup>で心みちたりるのは  
草の露をすすって生きる草ヒバリとおなじ

そして

雨露をしのぐばかりの漁具小屋のすまいは  
草の葉むらに一夜の宿をむすぶ蝶とおなじ  
ではございますが

それが なんでございましょう

わたしは

ヤシペという「しあわせの風」を  
いのちの帆いっぱいにはらむ小舟のように  
その日その日の海原を

豪奢に旅していたのでございます

おお

わたしのヤシペ

草むらにひそむ青大将をふみかけて金切声  
をあげるわたしへと

舟から抜き手を切って泳ぎかえってくる  
たくましい ヤシペ

でも

寝苦しい真夏の夜

イシカリ川の堤防の草むらに座って

サソリ座の赤い宴<sup>ウタケ</sup>のしずくを目に汲むわたしの

夜露にしめった肩に

ふと

ならんで座るヤシペの肩がふれる気配で  
さっと立ちあがってしまうのは

わたしの方でございますし

——ナア

漁具小屋ハ 暗クテジメジメスルベ

コッチノ家デ

イッシヨニクラスベヤ

と 吃水線いっぱいに海をどもり飲む舟の  
ように言うヤシペに

——イエ

滅相モゴザイマセン

と はげしくかぶりをふり

サヤからとびだすサヤエンドウの実のよう  
に

その場をかわして

漁具小屋に戻ってしまうのも

わたしでございませう

しかし

よろこびのドラムをはげしく打ち鳴らす心

臓が

どんな恥じらいの火を頬に吹きつけてよこ  
したかを

割れた手鏡のかけらで確かめようと

どんなに

鏡のおもてを覗きみても

なぜか

ひややかな鏡面に

わたしの顔はまったくうつてはいなかつたのでございませう

8

ああ

イシカリ川の水の深層をかくぐっていく  
エゾウグイの群れよ

わたしは だれ？

光のサザ波を満載した川面の背に  
音符のマークを描いていくミズスマシよ

どんな鏡のおもてにも  
おのれの顔 おのれの姿のうつらない  
このわたしは だれ？

ほんとうに わたしは  
この世界に 位置をもつの？

しかし  
そのまにも時はうつろい

きょうという時間が  
浜薔薇の花びらとなって散り

あすというゆくだが  
真紅の実を宿しはじめますと  
北半球は 秋

でも  
不吉な予感にふるえているのは  
けっして

ヨシの葉ずえでけたたましく囀るオオヨ  
シキリの咽喉笛ばかりではなく

おのれの過去に  
いいしれぬ恐怖をおぼえはじめたわたしと  
て

おなじだったのでございます

寒さにこごえ震えるヤシペと

死の予感にみちみちた吹雪のオオハクチョ  
ウをむすびつけたとおなじ

あの 水のようにすぎとおった一本の糸が  
もし

このわたしの指にもつながっていると  
した

いえ

ひょっとして

謎の藪ふかくまぎれこんでしまったわたし  
の由来をとく鍵が

もし ヤシペの  
どうしても思いだせないという

あの 吹雪の  
闇を封じこめたまっしろい箱の中にある  
としたら

思えば思うほど

井戸端でヤシペの肌着を洗いゆすぐわたし  
の指は

空のいろに青ざめわたっていくばかりなの

でございます

そんなわたしのひそかな不安をよそに  
イシカリ平野をのみつくそうとする

秋の夕焼け空の  
なんという琥珀いろの美しさでしょうか

あの

浜薔薇の花びらから絞りとったかのような  
真紅の血の宴は<sup>ウタゲ</sup>

だれの

永遠に奪い去られたいのちの代償なのでし  
ょうか

出血しつづける傷口の苦しみに身悶える

夕焼け雲をみるにつけ  
つい

わたしの脳裏を鳥の影のようによぎります  
のは

あの 冬の日のオオハクチョウが

おそろしい吹雪の爪をひらいて  
あわれなヤシペに襲いかかりましたように

このわたしも

まったく不意に

もとの魔性の姿にたちかえり  
牙をむいてヤシペを噛みしだき



一瞬の間に  
はかない命の灯を吹き消してしまふのでは  
なからうか……

という

ぬぐいきれない懸念だったのでございます」

9

「夏のステージを彩どる主役が  
とりどりのよろこびを放射する光のプリズ  
ムといたしますと

秋の真紅なまでに黄金の奏で手は  
風のパイプオルガンでございましょうか

わけでも

川口から上流へとはしる刃の光を  
ものの見事にうらがえしていく

シルバーホワイトの逆風は

イシカリ川の背を逆か撫でする痴れ者では  
ございますが

かく言うわたしも また

吹きすぎる風のように失われていった無量  
の記憶を

ふたたび手元にたぐり戻したい  
という 仕極く自然な欲求の風糸を

なおも底なしの闇へとときはなつ  
逆風になりはじめていたのでございます

おお

わたしの いとしいヤシペ

暗い緑の草むらのように生いしげる眉毛よ  
ペリドットの光を沈めておし黙る瞳よ

彼の

金属の花束のように鳴りひびく筋肉の総量  
こそは

わたしの

失われた記憶の総量

彼の

想いの潮<sup>ウシオ</sup>がどっとおしよせて吃りこむ心の  
水門こそは

わたしの

失われた鏡像をすなどり泳がせる

時間の扉

もはや

わたしの過去をつまびらかにするどんな言  
葉の星明りも

赤銅いろに陽焼けしたヤシペの

ブロンズ像のようにずっしりした顔の輝き  
に及ばず

よみがえる記憶の指が摘みとるどんな出生  
の秘密も

沈黙の森から紡がれるヤシペのまなざしの  
いつくしみの糸の美しさに比すべくもござ  
いせん

さようでございます

どうやら わたしは

どことなし不吉な血の匂う過去とひきかえ  
に

ヤシペという

よろこびの冠をうち鳴らす現在を  
手に入れたのでございます

そんな訳でございますから

炉端で針仕事に精出すわたしをじっとみつ  
め

—— ウン タシカニ

アノ 吹雪ノ日

オレガ出会ッタノハ……

といいだすヤシペの重い口元を  
すばやくわたしの手でさえぎり

—— オネガイ

モウ 昔ノコトハ

ナニモ イワナイデ

と 哀願するわたしは  
やっぱり

ひどくおそれていたのでございます

過去のわたしをとり戻す瞬間

わたしは

確実にヤシペを失ってしまうのではな  
ろうか……と」

10

「嵐

それも はじめは

澄みきった青空の鍵盤に

そっと触れる

すぎとおった指

しかし みるまに

大気のグランドピアノはくつがえって

音の海は

大地のひだ目にこぼれ散り

いつしか

夜陰に乗じて跳ね躍り暴れまわるけもの

台風

ゴーッと風の咽喉で吠え

ガーツと 軒にくらいつく牙  
ミシッと 小屋全体をきしませ

—— 助ケテー ヤシペ

と

柱にしがみつき 絶叫するばかりのわたし  
なのでございます

しかし ついに

たてがみふり乱して襲いかかる暴風は  
むごい爪をひらいて

わたしの小屋をガッとわしづかみ

水びたしの地面からぐいと持ちあげ

思いつき

夜の地平に叩きつけたのでございます

屋根はフキの葉のように裂け

藁しべのようにへし折れた柱と柱のはざま

に

かろうじて

わたしの一命は宙吊りのかたちになったの  
ではございましたが

それと気づいて駆けつけたヤシペの

水車のように回転する逞ましいりょうの腕

のはたらきなしに

嵐と闇と孤独の十字架にはりつけられたわ  
たしは

朝まで命の縄をないつづけることができな  
かったのにちがいございません

こうして

あの恐怖の一夜も一陣の夢と消えて  
うそのように晴れあがった翌朝を

ヤシペの家の炉端で迎えたわたしではござ  
いしましたが

熱い血潮のうずき流れるこの体に

彼の指一本触させまい……との決心を  
ついに変えようとはしなかったわたしは

やっぱり

ヤシペの身をただただ案ずるばかりの  
盲いの子だったのでございます」

11

「おお ヤシペ

わたしのいい陽ざし……なつかしい  
葉ずれ……恋しいそよ風

いくど そう口走って

わたしの寝所と彼の寝所をへだてた

一枚の板戸を  
がらりと押しあけ

髪ふり乱して

彼の男くさい胸の内にとびこもうとしたこ  
とでございましょうか

だが

はげしく燃えさかる快楽<sup>ケラク</sup>の火に

ヤシベの運命を投げ入れ

滅びの灰に帰してしまふには

あまりにも わたしは

いま こうして 人のかたちで生きている

ヤシベに

恋い焦れてしまっていたのでございます

わたしさえ

この苦しみのほむらに焼け爛れる日々を耐  
えてあれば

ヤシベは

すこやかにヤツメウナギをすなどっていら  
れる……

そんな訳で

おなじ藁ぐず屋根の下に寝起きし

心は とうに

ターコイスブルーの空とセルリアンブルー

の風のようにとけあつて一つなのに

頬と頬のふれあいをすら固く禁じられた男

と女の

タンタロス<sup>タンタロス</sup>の苦しみに悶え狂う日々が

秋の底を這いずりまわっていたのでござい  
ます

ああ

なんという拷問でございましょうか

稗<sup>ヒ</sup>ごはん<sup>ヒ</sup>に小魚いっぴきと味噌汁だけの

ささやかな夕餉をおえて

炉端に手をつき

——オヤスミナサイ

と低くあいさつをして

寝所の板戸をぴちりとしめ

まっくら闇のふしどに身を横たえてのちの

薄い木の板一枚へだててかわしあう

押し殺した息づかいのふいごは

ふたりの肺を焼きはらう呪いの業火

衣のすれあう身じろきの音は

ふたりの耳に吹きすさぶ怨みの嵐

でございますから

悪夢の一夜がやつと幕を閉じたとある朝

純金の光のさしこむ炉端で

いきなり ヤシベが

重い唇を必死にひらき

——オラノ

嫁ッコニ ナッテケレ

と

額に脂汗をじつとりと滲ませて申しますの

を

おもわず微笑の花となって受け

——ウレシユウ ゴザイマス

と

そうお答えしたかったわたしではありまし  
たものを

つい

口をついてでましたのは

それとは全く裏腹の

——滅相モ ゴザイマセン

ウマレ 素性モ定カナラヌコノ身ニ

トテモ トテモ……

という

枯枝のようにそっけない言葉だったのでご  
ざいます」

12

「いとし いとしヤシベ

あなたが

わたしから離れて ひとり

イシカリ川に舟を浮かべておりますと

かえって

草むらのように濃い眉のそよぎ

陽の光を浴びて赤錆びた額の色合いまで  
鏡にうつしだすようにはっきりとみえます  
のに

いざ

炉端で面とむかって座わりますと もう  
だれの顔やら見定めもつかないようになっ  
てしまう  
わたしの

心は

岩に打ちつけられたガラス玉のように粉々  
にくだけ散り  
狂おしさのかけらがキラキラと光りをます  
ばかり

それにいたしましたしても  
夜の闇の底にうち伏し  
板戸一枚むこうのヤシペの  
さやりという身じろぎの気配に

じっと耳をすまし  
衣ずれの奥に瀬々らいでいるはずの  
男の熱く濃い血潮の匂いをかぎあてようと  
してしまふわたしの  
なんという業の深さでございましょう

ああ ヤシペ いとしいヤシペ  
あなたが うらめしゅうございます

なぜ

春の雪だけの濁流にのまれかけたわたしに  
救いの權をさしのべてよこしたのでござい  
ますか

どうして

恋しさの草花がむせぶように咲き匂う野辺  
を

裸馬のようにひたはしらせておきながらも  
ゆくての地平線に

いまわしい過去という崖を吊って  
疾走する思いをそこで断ち切ってしまうの  
でございいますか

ああ ヤシペ 恋しいヤシペ

わたしは  
記憶を失ったのではなく  
まったく新たな記憶を得たのでございいます

わたしたちは  
呪わしい過去という鉄の足枷を断ち切るこ  
となしには  
身も心も熱くとかし合う男と女になること  
ができないのでございいます

おお ヤシペ  
どうか お願いですから

わたしといっしょに 呪いの過去を失ない  
わたしといっしょに 許しとよろこびの現  
在を得てくださいまし  
ヤシペ わたしのヤシペ」

13

「つめたい光の海を旅する太陽の  
黄金の舟べりからこぼれ落ちてくるしずく  
が

すこしずつ銀いろにくすんでまいりますと  
いつしか  
秋もおわりでございいます

川面からけぶりたつ霧のベールの蔭で  
イシカリ川が  
琥珀いろの秋をさらりとぬぎすて  
しらじらとした冷気を肌にまといはじめま  
す

どこからか  
冬の序曲が  
白銀のシンバルを震え鳴らしはじめるので  
ございいます

カワヤナギの枝葉やスキの穂末に  
キラリと宿る露のしずくを  
寒さのすきとおった指が

霧氷の花にかえていく造化の  
神秘なうつくしさ

大地の種子をつき破って鋭く光る  
霜のダイヤモンド都市

いたる水たまりのおもてを制圧していく  
氷のガラス連邦

まさしく宇宙とはつねにはじまりと終りを  
同時に奏でる  
シンフォニーの環でございましょうか

そして 冬とは  
そこからこぼれ落ちてくる  
一本の純粹旋律の穂でございましょうか

それにいたしましたも  
寒さは

なぜか わたしを  
甘くすきとおった気分の花びらに  
すっぽりとつつみこんでくれるかのような  
のでございます

ア  
渴き切った咽喉をうるほす液体のサファイ  
ア  
飢えかつえた胃の欲求をみたすよみがえり  
のパン

なぜか わたしは  
寒さの到来に

いいしれぬ懐しみの情をおぼえて仕方がな  
かったのでございます

しかし  
ヤシベは 逆でございました

櫂のようにまっすぐだった背を  
蛇のように曲げて歩くようになり

すこしずつ氷点下へと落ちていく水の冷淡  
さを厭って  
イシカリ川に近づくのを避けはじめたので  
ございます

そればかりではございません

石のように冷えていく大気の唇に  
体温をすすりとられるのを防ぐかのように  
わたしの体の火照りを盗もうとしはじめた  
のでございます

鎌をふるって枯れガヤを刈りとるわたしの  
背後から  
影坊子のようにしのびよっては

ねぐらをとり戻そうとする鳥の姿勢で  
わたしを抱きすくめようとするのでござい  
ます

あ

ふりむかずとも  
わたしの目の鏡には  
恋の焰に焼けただれたヤシベの  
あわれな顔が  
まざまざとうつつているのでございます

でも

わたしは あえてふりかえりざま  
ヤシベの  
銀灰色に燃える目の中心を  
井戸の底をみるようにのぞきみたのでござ  
います

そして ついに  
わたしは見たのでございます  
——彼の目の井戸の うつろな底に  
ありありとうつつている  
氷柱<sup>ツララ</sup>のヤシベと  
それを噛みしだくわたしを

あああああ

力いっぱいヤシペを突きとばし

枯草の匂う川原を

わたしは イシカリ川へとはしったのでございませう

——川の水が深くゆさぶり起こしている

水底の闇に

わたしの身を投じようと

だが

わたしをうちくたくかにみえた衝撃の拳は  
ヤシペをも同時に襲っていたのでございませう

わたしじしんのたてる草ずれの音のように

わたしを追ってまいりました彼は

イシカリ川の切り岸にあと一步のところで

逃げまどう小鳥のようなわたしを

逞ましい二本のかいな羽がいじめの網に

とらえたのでございませう

そして

わたしの目を

底なし沼でものぞきこむようにじつとみつ

め

恐怖におののいて言ったのでございませう

——目ダ

ヤッパリ コノ目ダ

アノ 吹雪の日

オラノ……

——ヤメテ ヤシペ!

野火のような叫び声をあげて

ヤシペの熱いかいないましめをふりほど

き  
イシカリ川とは反対の草むらへと駆けだし  
たわたしは

ヤシペから……というよりは

むしろ

いくらはらいのけようとしても

執拗に姿をあらわしてくる

亡霊のような過去から逃れようと

息せき切ってひた走ったのでございませう

ふとわれにかえってみますと

またしても わたしは

住みなれたヤシペの家の前に

ひとりたちすくんでいたのでございませう

14

「慣れない手に鎌をふるって

黄金いろに枯れたカヤを刈りとりますのも

ひとえに

いとしいヤシペのため……

もともと

この川のヤツメウナギは

ことのほか

どろりとよどむ砂泥のふしどが好きでございませう

そこをめがけて

ヤシペが

ほそい綱にしっかりゆわえた“胴”を沈め

口を下流にむけ

錨の重量でしっかりと固定いたしますと

あわれなヤツメウナギは

よき寝ぐらとばかりに這いずり入り

もう

けっして外には出られなくなってしまうのでございませう

でございませう

“胴”という名の むごい畏

それを ヤシペは

川原の野生のカヤを材料として

冬の炬端で編むのが常でございましたが

ひょっとして

イシカリ川のこの岸边こそは

いちど入ったが最後二度とは出られない  
洞”で

わたしとヤシペは

そのおそろしい罠にはまった

二匹のあわれなヤツメウナギなのでは……

と いぶかりつつ

刈りとったカヤを束ねるわたしの頭<sup>コウヘ</sup>に

ポツリと

鋭く冷たい雨のしずくが

突き刺さってきたのでございます

それをきっかけとしての

季節はずれの俄か雨のすさまじさ

天のダムが決壊したかのような勢いで

どしや降りだしたのでございます

あわてて

裏庭の物干竿にかかった洗濯物を取りこむ  
まに

もう全身 川底にもぐりこんだかのように

なずぶ濡れでございます

初冬の雨は

骨のずいにまでも毒と申します

ほうほうの態で家につけこみ

やわ肌べつとりと吸いついてくる着物を

いちまい いちまい  
花びらをむしるようにぬいでおりますうち

パツと戸があき

これも全身ずぶ濡れのヤシペが

濁流のようにとびこんできたのでございま  
す

あ

あらわに濡れ光る乳房や肩を

たったいま脱ぎすてたばかりの濡れ衣で

おおいかくそうとするわたしをみるや

なぜか ヤシペは

棒立ちになり

やがて

かすれ声で絶叫したのでございます

——ソノ

黒い髪ダ

ソノ

マッシロイ肌ダ

ソノ

スキトオルヨウナ着物ダ

アノ

吹雪ノ日

イチドハ

オラノ命ヲ奪オウトシナガラ  
ドウシテカ

オラノ命ヲタスケダ

アノ女コソ

オメエダ

——ヤメテ ヤシペ!

火のように口走り

ヤシペの口をふさごうと

おもわず手をのべたわたしの裸身を

彼の

欲望の雨でびしょ濡れのかいなと胸が

しっかりと抱きしめた

その瞬間

つい

われにもあらず

氷のような冷たい声で

わたしは 言ってしまったのでございます

——アノ 吹雪ノ日

オマエハ

ワタシニ 約束シタ

ケッシテ

ワタシト出会ッタコトハ

口ニセズ

イツマデモ

雪ノヨウニケガレナク

氷ノヨウニ純粹ナココロデ

ワタシヲ愛スル……ト

ソシテ

ソノ約束ヲ破レバ

死……ト

わたしではない

もうひとりのわたしが

わたしの内部のくらい洞<sup>ホコラ</sup>から

すーっとすべりでてくるのを感じますのと

いっしょに

漆黒の髪 ぐれないの唇 血潮のほむらを

焚く総身が

みるみる すきとおりはじめ

吐く息までが

吹雪の兆<sup>キザシ</sup>をあぶりだすようで……

ああ なんということでございましょう

しかし

わたしの驚ろきにもまして

ヤシペのそれは大きかったのでございます

あああああ

うつろにあけた口から

魂のぬけたような甲高い声をもらし

りょうの手を扉のようにひろげたまま

ずしっ ずしっ 後ずさり

とつぜん きびすを返えすや

あけっぱなしの戸口から

ますます勢いを増す雨の世界へと

駈けだしていったのでございます

そして

なおも 天がとけだしたかのように降りし

きる豪雨は

ヤシペがのこしていったのにちがいない

ふりしぼるような号泣の声を

夜もすがら奏でてやまなかったのでござい  
ます」

15

「ヤシペ

冷たい豪雨の扉をおしあけて

ヤツメウナギとりの小舟もろとも

イシカリ川の濁流の底へと立ち去っていつ

たひとよ

どうか

わたしのもとに帰って来て下さいまし

森の木洩れ陽よりもすくない

ほんの一日……

いや

永遠にとじられることのない魚の目がまた

たきする

たった一瞬でもよろしゅうございます

もう一度 もう一度だけ

あの

赤銅いろのりりしい顔をおみせ下さいまし

そのときこそ

もう このわたしは

どんな戒めの縄をも決断の刃で断ち切って

あなたの……恋しいあなたのみ胸に

とびこんでまいります

破滅の崖が

なんでございましょう

滅びの火が

なんでございましょう

そう口走りながら

髪をたてがみのようにふり乱し



裾もあらわに

あちらの切り岸　こちらの渚と

イシカリ川の流れにそって

恋しいヤシペをたずねまわるわたしは

もはや

ふたりがけもののようにはげしく結ばれる

ことによってもたらされる

どんな災いの日をも

けっしておそれはいなかったのをごさいます

ヤシペが

わたしの目をじっとみつめたまま

どんなに　くわしく

あの吹雪の日のことを物語ろうと

また　このわたしが

どんな不気味な呪いの声を

わたしではないもうひとりのわたしの咽喉  
からしぼりだそうと

それが　いったい

なんでございましょう

そんな

思いつめの断崖のへりを伝いあるいていく

わたしをとりまいて

北の気は

ますます透明度をまし

はての風は

さらにまばゆさをつのらせ

はっと

空をみあげたわたしは

おもわず息をのみました

なにものかのすきとおった指が

天のいくえにも重なりあった青の層を

いく筋ものいく筋もの光の絹糸に

サラサラと紡ぎはじめているではござい  
せんか

ああ

ついに

初雪の兆しだったのでございます」

16

「はじめての雪の結晶が

純白の花びらを

初冬の空に散りふぶかせましたのは  
その数日後のことでございます

雪…

それは

寒さのつばさをかいうって

純粹の空をひとりとおオオハクチョウの

挫折の悲しみをうたう

むすうの羽毛でございましょうか

一片の雪を追って

蝶のようにわたしは舞い

ひとひらの雪を手のひらにいただいて

涙のしずくをわたしは泣きましたが

ふしぎと

すこしの寒さもいたみとして感じないば  
かりか

むしろ

寒さが

まばゆい光となって

わたしの血管に流れ入り

身も心も

ますますコバルトブルーに透けていくのを  
おぼえるばかり……

こうして　わたしは

なおも降りかかる雪といっしょに舞い  
舞いの恍惚にいざなわれて

雪の吹き流れる方へと

川下めざし下っていったのをごさいます

そして

やがて すべての雪ひらが

すーっと プラチナの煙のように吸いこま  
れていく

ドロタモの林の奥で

ついに わたしは

恋しいヤシペを発見したのでございます

——風となって立ちつくす

声もなく 透明なヤシペに……」

17

「ヤシペ いとしいヤシペ

鼓動のドラムの鳴りひびく胸に

しっかりと わたしを抱いて

もう けっして

わたしを離さないで

あなたが

いまは もう

沈黙の舌で語り

光の背で冷えていってもいいのです

さあ

ヤシペ 恋しいヤシペ

手をつないで

おうちに帰りましょう

とろとろ燃える囲炉裏の火のそばで

ふたりだけの祝言の盃をかわし

もう

あの呪わしい板戸で仕切られることのない  
部屋で

わたしたち

はげしい息と息になりましょう

熱い声と声になりましょう

ヤシペ わたしのヤシペ

こうして

この世にいるはずのないヤシペの手をとり  
いつしか吹きすさびはじめた吹雪の中へと

まろびでていったわたしは

ともすれば

雪煙りとなって消えうせていくヤシペの面

影に

必死にとりすがり

ヤシペ ああ ヤシペ

わたしさえ

生死を越えるはげしさであなたを愛さなか

ったら……

そして

あなたさえ

現在のわたしの中から過去のわたしを呼び  
だしたりなどしなかったら……

ああ ヤシペ ヤシペ

と

泣き叫び

泣き叫びつつ わたしは

いまは

わたしそのものとなって吠えたける  
吹雪の中心に

ぽっかりと口をあけた

まっしろい闇の底へと

声もなく落ちていったのでございます」